人権への道

同和問題の疑問に答えて(1)

同和問題はみんなの問題

「一人一人を大切に」―それは、人権尊重の基本姿勢であり、この世に生まれ、生きてゆくすべての人々に課せられた命題といえます。しかしながら、現実の人間社会には、いろいろな差別や障害がみられ、特にその人の責任でない部落差別が、今なお根強く残され、いろいろな障害となっていることがあります。そうした部落問題に対するいろいろな市民意識を見つめ直し、今後に向けて、正しい理解を願うものです。

お姉さんへ

一年前結婚したお姉さん
しあわせでしたか
そして　今　しあわせですか
お兄さんとの結婚を
部落民だということで反対された
たお姉さん
自分自身の人格もみてもらえず
部落民だと反対された
それでも　あきらめずに
お姉さん　がんばりましたね
お兄さんの両親に
手紙を書いていたうしろ姿
なんとかわかってもらおうと
その姿の
真剣だったこと
わすれません
結婚式にも
お兄さんの両親は出席しませんでした
くやしかった
悲しかった
思い出すたびに
いかりが
どっと胸にこみあげてきます
けれど　お姉さん
あなたは　たえました
くやしかったでしょう
部落に生まれたことを
どんなにかのろったことでしょう。わたしの何倍も……
花嫁姿はきれいでした
しあわせだったでしょうそのときは。けれど、暗い思いが、どこかにあったでしょう
なにか　わりきれないものが

差別をして　何の価値があるのでしょう
差別する人は、何もわかってないのよね
お姉さん、そう思いませんか
今は　お姉さん　ほんとにしあわせですね
お兄さんと二人
道ばたにならんでいる

二つの石のように
なかよく
いつまでも……
よかったね　よかったね

―大方中三年生の詩から―

差別のない明るい社会を

戦後、日本は政治・経済・文化・社会等の全般にわたり、めざましい発展をとげてきました。

しかし同時に考えなければならない問題もたくさんあると思います。その一つが「人権問題」です。

民主々義社会の基本である人権尊重の思想が定着してきたはずであるのに、被差別部落（以下部落と略して書きます）に対する差別的な発言や、落書き等の問題が残念ながら後をたちません。

こうした現実から考えれば、わたしたちのまわりには今なお、いろんな差別や偏見が根強く残っているといえましょう。

部落差別の解消は国民的な課題であり、「その解消に向って国をあげて取りくまなければならない」と叫ばれるようになってから、はや十余年が経過しました。

本市においても〝お互いの人権を尊重しあい、差別のない明るい社会づくり〟をめざして、もろもろの運動や事業を実施してきました。

しかし、「同和問題は部落の人たちの問題ではありませんか」とか「わたしがしなくともだれかが…」という意見をよく耳にします。

これらの意見の底には〝同和問題は自分と直接関係がない〟という意識があるように思われます。そして、この考えが人権意識をにぶらせ、同和問題解決への進展を遅らせているのです。

昨年11月より南国市は、〝同和問題はみんなの問題〟であるということを、市民のみなさんに深く理解していただくために教育委員会の企画で、同和問題の学習を中心とした地区こん談会を、南国市の全公民館で開くことを目標に、現在各地域を巡回しています。

そこで今回の特集号は、これら地区こん談会の場で出ましたいくつかの同和問題に関する疑問点についてお答えすることとしました。

それぞれの問いについての解答は十分にご理解いただけるよう解答しきっていない部分もあると思いますが、今後続けていく「地区こん談会」のなかで、市民のみなさんとともに、正しい考え方を出していきたいと思います。

正しい意識を育てるために

【問1】
部落差別はそっとしておけば自然になくなるのではないでしょうか。

【答】「差別、差別とさわぐから、かえってなくならないのであって、そっとしておけば自然になくなるのではないか」「今の人は何もしらないのに、〝部落問題〟を教えることで、よけいに差別意識をさせているのではないか」という声をよく耳にします。

しかし、明治四年発布された解放令により、部落は解放されているはずですが、百年たった今日、今なお部落差別は生きつづけている事実を否定することはできません。部落差別が「そっとしておいてなくなるもの」であるならば、すでにこの問題は解決しているはずであるのに、今日まで残されているのはなぜでしょうか。

たとえば「学校で同和教育などする必要はない。子どもたちは純真で何も知らないものだから、部落のことを教えるとかえって差別を強めることになる」という意見がよく出されます。

しかし、よく考えてみてください。今、差別している大人たちも、かってはいずれも純真な子どもだったのではありませんか。それなのに人を差別するようになったのはなぜでしょうか。それは、この問題を正しく教えられなかったためではないでしょうか。そのため、部落に対して誤った考え方や偏見をいつのまにか身につけて、それを正す教育がなされなかったために、部落に対する差別意識が強く残されてきたものです。

だからこそ、「寝ている子」を正しく起こし、部落問題について正しく認識できるような教育の営みがあらゆる場所で行われなければならないわけです。

同和教育学習会

あなたはどうですか

【問2】
わたしは差別などしていません。それなのになぜ学習をせねばならないのですか。

【答】「わたしは差別していません」という人の多くは、「言葉や態度で部落の人を侮辱し、さげすむことだけが差別だ」と考えているのではないでしょうか。

また、「わたしは、よく部落の人とつきあいがあるし、酒を飲んだりしているので差別はしていません」という人がいます。人と人との交際で、あるていど親しくなれば、お互いに行き来するのはあたりまえのことです。

このごくあたりまえのことを、部落問題が話題になると「差別をしていない」証明として取りあげる人がままありますが、「飲食をともにしている」などとことさら口に出てくるところに、自分には気づかない部落に対する差別意識が心のどこかに残っているのではないでしょうか。

わたしたちは、「心のなかにひそむ差別意識に気づいていない自分の姿」を、問いただす必要があると思います。

きびしい差別のなかで生きぬきながら、差別とたたかいつづけている部落の人びとの苦しみや、悩みを知ろうとせず、われ関せずの傍観者的な姿勢で「わたしは差別をしていません」といえるのでしょうか。

第三者的、傍観者的な姿勢であることは、間接的に差別を認めていることになり、これでは部落差別をなくすることはできません。

差別を正しくとらえ、差別を憎み、差別を許さない人間となって、始めて「わたしは差別をしていない」と言えるのです。

あなたのひとことが

【問3】
ちょっとしたことでもすぐ差別だといって騒ぎたてているように思いますが。

【答】部落問題の学習会でも、発言したことが間違っていたら、すぐ、「差別発言だ」といって問題にされたりはしないだろうか、と考えている人もいるのではないでしょうか。

部落問題が十分にわかっていたら、差別的な発言のあるはずがありません。わかっていないから学習しているのです。だから、ときには間違った発言をすることもあると思います。しかし、その場合には、みんなと力を合わせ、その場での学習を深めるなかで誤りに気づき、解決していくことができます。したがって、学習会の席上で出された発言で問題になったことはありません。

ただ、日常生活のなかで、「たったあればあのことを言っただけなのに」とか「ちょっとこうしただけなのに」などといった場合でも、その人の心の底には差別意識があるからこそ、このような言葉が出

てくるのですから差別となります。要はどんな気持で言っているかが問題です。自分では何んでもなく言った言葉が、部落の人たちにとっては、氷の刃を突きつけられたに等しい深い傷をつくるんだ、ということに気づかなければなりません。

部落差別によって、ときには生きることさえも否定されてきた部落の人たちのことを思えば、わたしたちは、部落差別の不当さと、差別の罪の大きさを深く認識し、「ちょっとしたことでもすぐ差別だといって騒ぎたてる」などといった身勝手な考え方を、改めなければならないのではないでしょうか。

マキちゃん

中学校　高校を
立派な成績で卒業したマキちゃん
ひとみがとってもすんでいたマキちゃん
健康で職場のみんなから好かれていた明るいマキちゃん
マキちゃんは
何でもよくできた
ソロバン　タイプ　経理……
そのマキちゃんが
ある日　突然　会社からいなくなった。なぜ　それは
あの心ない
あの一言のために
――店の同僚の詩から――

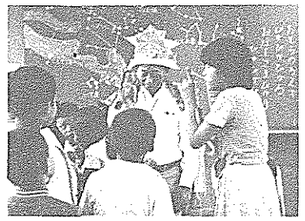
より広い目で

【問4】
差別をされるのは部落の人たちに言葉づかいが悪いとか、差別されてもしかたがないところがあるからだと思います。部落の人たちが直すようにすれば差別はなくなると思いますが。

【答】部落の人であろうとなかろうと、乱暴な言葉づかいや問題のある生活態度を改めるよう努力することは、豊かで幸福な社会生活を送るために当然のことです。

ところでこのかたの考えからすると、部落の人でも生活態度の立派な人、言葉づかいがていねいな人、教養の高い人たちは差別の対象となっていないと考えられているように思いますが、はたしてそういう人だけど、部落の人ですとね」という声を耳にします。そうした立派な人たちでも結婚や就職の際には、差別を受けているのが現実です。

部落地名総鑑といった差別図書がひそかに販売されたり、また就職や結婚で身元調査がかくれて行われているということは「部落出身の人は、いや」といった考え方が渦巻いていることを物語っています。



子ども会学習活動

こうした誤った見方や考え方は、部落には劣悪な生活環境がいまだに残っていて、解消されきっていないところから起ってくるからであり、そこに問題がひそんでいるといえましょう。そしてその問題解消の一つの方法として、現在部落内においても集会所学習等をもって、教育・文化・体育等の向上に努めています。

表面的なことを取りあげて、部落差別の原因を一方的に部落の人たちに向けるのでなく、部落問題の根本的解法には、なぜそうなってきたか、それがどう変っているかをも知り、目を広いところに向ける必要があると思います。

結婚の自由は

【問5】
知識として理解できても、結婚の場合になると「やっぱりどうも」と考えますが。

【答】部落出身ということで、結婚が反対される場合をみてみますと、本人たちは強い愛情と決意で結ばれているにもかかわらず、親や周りのものが「自分はよいが親せきがうるさい」「息子や娘が一生苦労する」「他の兄弟、姉妹の結婚に差しつかえる」などという理由によるケースが多いように思います。

ご承知のように日本国憲法では「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し……」とうたってあり、個人の尊厳と両性の平等は侵すことのできないもので、なによりも本人たちの主体性が尊重されなければなりません。

ですから親は、世間や親類のまちがった意識や不当な干渉に左右されて反対したり、反対のための口実として、周りのものの差別意識を利用するのでなく、むしろ人権尊重の考え方にたって、誤った人びとを説得する勇気と努力が必要ではないでしょうか。

わたしたちの周りでも「家の格式がちがう」とか「家が貧しいから」といったことで結婚が反対されるということを聞きます。子どもの幸せを願う親として、このような不当な理由で断わられたとしたら納得できるでしょうか。決して認められることではありません。

いずれにしても、部落差別を許すような社会のなかでは、私たちの結婚の自由もまた保障されないのです。

わたしたちは、差別を容認しないしっかりした人権思想を身につけ、一人一人が勇気をもって主体的に取りくむべきではないでしょうか。

差別の残した悲しい生活環境

【問6】
同和対策事業で部落だけがよくなって、逆にわたしたちが差別されているように思いますが。

【答】「同和地区は小さな道まで舗装されていて、同和地区だけがよくなっている」という声を耳にしますが、言っている人は、実際部落に入ったことがあるでしょうか。

同和対策事業によって部落の環境などは改善されつつありますが、実際に部落に入ってみると、まだまだ道もせまく家が密集しており、昔のままにごみごみしたところがたくさんあります。

差別の現実に学ぶ

部落の人たちは長い間、劣悪な環境におしこめられてきましたが、その事実を無視して「部落はごみごみしている」「非衛生できたない」などといって差別されてきました。

現在、行われている同和対策事業は、部落のこのような極めて低い生活環境の状態に放置してきたのは行政の責任であるので、「部落差別」をなくするために実施しているものです。

ところが、同和対策事業が進展するにともなって、こんどは「部落だけがよくなって……」といった言葉がささやかれるようになったわけです。それでは部落だけがよくなっているのでしょうか。

今日、日本の道路はだんだんと整備され、山村、避地といわれるところでも、車の乗入れができる状態になりました。

これはご承知のかたもあると思いますが、「過疎地域振興特別措置法」等に基づいて、整備されつつあるものです。

このほか、「山村振興法「離島振興法」など数多くの特別措置法ならびに振興法に基づいて、それなりの改善がされているわけです。

したがって部落の人たちの人間としての権利を回復するための同和対策事業は、部落の人たちだけでなく、すべての国民の権利を確立させ、生活を向上させているのです。

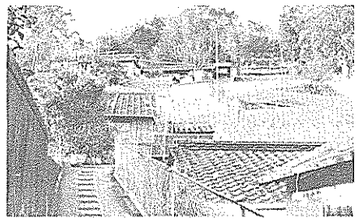
参考までに

同和対策事業の経費は国が3/4、地方公共団体が1/4負担となっていますが、この地方公共団体負担分は、全額起債ができ、のちに地方交付税によって、元利金の80%が地方公共団体に返ってきます。

社会意識の変革を

【問7】
わたしたちは、部落問題について、なぜ誤った見方、考え方をしてきたのでしょうか。

【答】わたしたちは、部落のことについて、いつ頃、だれから、どんなことを教えられたか、自分自身の生活体験をふりかえってみると、人によって、その時期や知ったことがらについては違いがあるにしても、何らかの知り方をしてきたといえましょう。今一度、自分の知り方について静かに思いおこしてください。



がけ上の家へのびる狭い道

多くの人たちは、「あそこの部落に遊びにいかれん」、「部落の人にとり合われん」、「あの人たちは、わたしたちとちがう」、「集団でかかってくるのでおそろしい」といって、家の人たちや社会一般から予断と偏見による知らされ方をされたことによって、部落の人は悪い人たちだという先入観をもち、部落のことを知った時点から、まちがった知り方をしてきた人たちがあまりにも多いといえます。

このように、多くの国民が部落問題について、誤った知り方をしており、これに地域社会における日常の部落差別会話などによって、だんだん差別意識が積み重ねられ、後には、やはり部落の人たちは、われわれと人種のちがう人たちだとか、悪い人たちの集団だといった偏見による部落差別意識が形づけられ、その人の見方、考え方をかたくなにしてきました。

このことが社会意識としての部落差別観念となって現在も存在しており、この意識が部落問題解決の大きな障害となっているのです。

夜明け

みずた志げこ

朝が来てほしいんじゃない！
ほんまの夜明けが来てほしいんじゃ！

分べん室から聞えてくる
もうじき親になろうとする女の
うめき声が
ぴったりとやんだ
「オギャアー　オギャアー」
生をうけたよろこびの産声じゃろうか
夜明け前の静けさを　けちらす
ようにきこえてくる

一九八〇年十月九日　午前五時
人として生きる権利を
力いっぱい握りしめて
こまい生命は大地をふんだ
朝じゃない！
朝がほしいんじゃない！
この児のために　ほんまの
夜明けがほしいんじゃ！

（以下次号へ）